
[成果情報名] しゅんれいの早播における適正追肥時期

[要約] しゅんれいの早播（11月中旬播）での適正追肥時期は、初期生育が高温で進んでいる場合は1月上旬から2月上旬、初期生育が低温で遅れている場合は標準播の施肥基準同様、1月下旬から2月中旬である。

[キーワード] ビール大麦、早播、追肥時期、しゅんれい

[担当] 農産部・麦類育種チーム

[連絡先] 092-924-2937

[対象作目] 麦 [専門項目] 栽培 [成果分類] 技術改良

[背景・ねらい]

近年育成されたビール大麦「しゅんれい」は側面裂皮粒や凸腹粒等の発生が極めて少ない被害粒耐性品種である。これまでビール大麦については、早播すると側面裂皮粒の発生が多くなることから、播種適期は11月25日～12月5日とされている。しかし、「しゅんれい」は側面裂皮粒発生に耐性があるため、早播適応性が高く、これまでより10日程度早播することができることが明らかとなった。そこで、本品種の早播での適正な追肥時期を検討し、安定多収栽培法を確立する。（農業振興課（H15））

[成果の内容・特徴]

1. 初期生育が平年より高温で進んでいる場合（16年度）、穂数は1月上旬追肥で最も多く、収量は1月上旬～2月上旬で安定して高い。2月中旬の追肥では収量が低下する（表1、図1）。
2. 初期生育が平年より低温で遅れている場合（17年度）、収量は、1月下旬～2月中旬追肥で安定している。1月上旬の追肥では、穂数が少なく収量は著しく低下する（表1、図1）。

[成果の活用面・留意点]

1. 初期の生育は地域で差があるため、地域ごとの生育状況により、適正追肥時期を判断する必要がある。
2. 生育が遅れている場合に1月上旬の早い時期に追肥すると側面裂皮粒の発生が多くなる。

[具体的データ]

表1 追肥時期の違いによる生育特性と収量関連形質

試験年度 (11月中旬～12月の 平均気温の平年差)	追肥 時期	出穂期 月.日	成熟期 月.日	穂数 本/m ²	容積重 g	整粒 千粒重 g	整粒 歩合 %	整粒 重 kg/a	同左 標準 比	外観 品質	タンパク 質含量 %	側面裂皮 粒率 %	凸腹 粒率 %	
16年度 (+1.8℃)	追肥Ⅰ	1/5	4.06	5.15	534	723	41.7	89.1	34.2	107	3.0	11.2	0.5	0.0
	追肥Ⅱ	1/26	4.06	5.15	492	736	41.4	89.8	31.9	100	3.5	11.5	0.0	0.2
	追肥Ⅲ	2/4	4.06	5.15	475	740	41.4	89.5	34.6	109	3.5	11.2	0.0	0.0
	追肥Ⅳ	2/15	4.06	5.15	471	726	41.6	86.5	30.1	94	4.0	11.3	0.1	0.0
17年度 (-2.2℃)	追肥Ⅰ	1/5	4.10	5.24	541	721	40.9	90.0	32.5	85	6.0	9.9	5.0	0.1
	追肥Ⅱ	1/25	4.10	5.24	609	716	41.4	89.3	38.1	100	6.0	10.3	1.9	0.1
	追肥Ⅲ	2/3	4.10	5.23	635	720	41.2	90.0	36.9	97	5.8	10.0	2.6	0.1
	追肥Ⅳ	2/15	4.10	5.24	610	713	41.5	89.3	37.6	99	5.5	10.2	2.5	0.1

注) 整粒重は水分12.5%換算値、整粒千粒重は無水換算値
 外観品質は1(上上)～5(中中)～9(下下)の9段階評価
 播種日は11月14日、施肥量(N成分kg/a)は基肥0.6+追肥0.3
 標準播での追肥適期は追肥Ⅱ～Ⅳにあたる

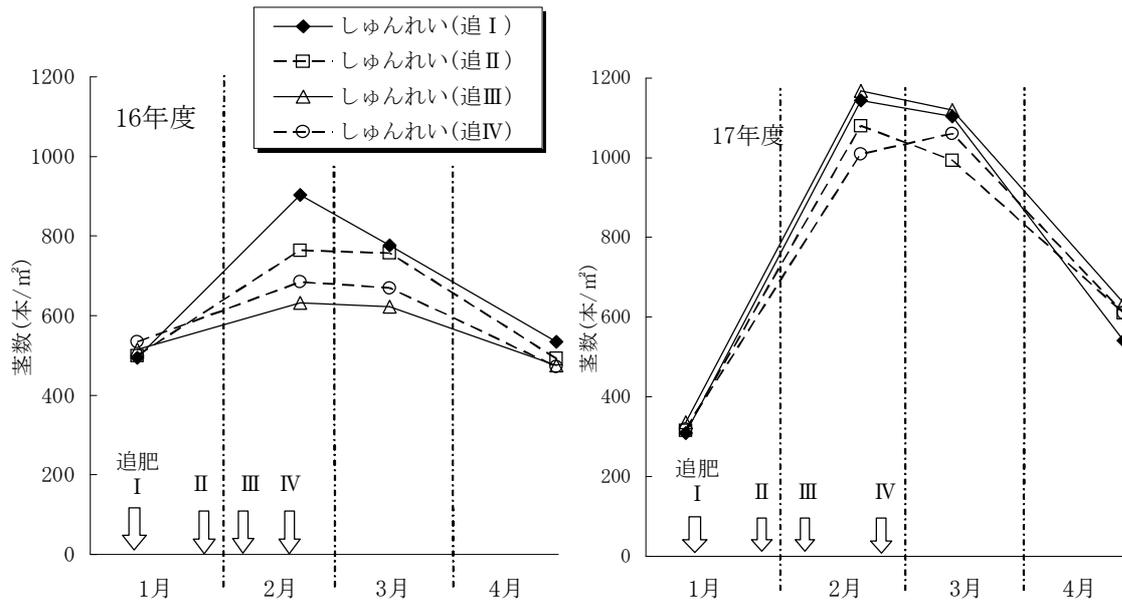


図1 茎数の変化

[その他]

研究課題名：暖地向き醸造用二条大麦新品種の育成

予算区分：国庫受託（指定試験）

研究期間：平成17年度（平成16～17年）

研究担当者：塚崎守啓、高田衣子、馬場孝秀、古庄雅彦